赤い鳥社主催「自由画大展覧会」と鈴木三重吉——石井鶴三宛三重吉書簡から見えるもの

髙野奈保（立教大学日本学研究所）

0　はじめに

信州大学所蔵石井鶴三関連資料から、鈴木三重吉による石井鶴三宛書簡（仮番号［書2—52］）が発見された。本稿では、この新出資料の解題を付し、昭和初年前後の三重吉の出版活動について考察する。

解題に先立ち、鈴木三重吉の略歴を述べる。鈴木三重吉（明治十五年～昭和十一年）は広島県出身の小説家・編集者・児童文学者である。漱石の門下生。神経衰弱の療養中に執筆した『千鳥』が漱石の推薦を経て「ホトトギス」（明39・5）に掲載され、注目を浴びる。その後『小鳥の巣』（『国民新聞』明43・3・3～10・14）『桑の実』（大2・7・25～11・15）などを発表するも創作活動に徐々に行き詰まり、出版業に活動の軸を移し始め、大正七年七月に児童向け雑誌「赤い鳥」を刊行。以降は編集業と並行して、再話や綴方の指導に力を傾注した。

1　鈴木三重吉の石井鶴三宛書簡

まず、書簡本文の翻字を掲げる。

石井様侍史

五月十五日

鈴木三重吉

拝復本日［久しぶりで　右傍挿入］出社いたしましてお手紙を
拝見いたしました。今度は［御　右傍挿入］多用中
を色々と御厄介をお願申しましてお
礼の申上げやうもございません。二十日
過ぎますと賞状も［メ　右傍挿入］タル（ママ）も出来上ります
ので、それを持参の上、お礼を申しに
伺ふ予定でをります。これまでにも早
速お伺ひ申さなければなりませんのでし
たが、劇学校の計画をたてたり、中
止したりして奔走してをりましたので
失礼いたしてをります。不悪お許
し下さいまし。新宿園は重ね〳〵御不［改ページ］
快をかけまして申訳もございません。
実は最初二十五日までの約束でした。
ところが、審査員のかた〴〵にさし上げ
た招待券に、［園は　右傍挿入］三十日までと記入したさ
うでしたし、園も延ばしてくれといひます

のでかたぐ〳〵二十［五　ミセケチ／四　右傍挿入］日の日に、三十日まで
延期することを命じました。尤、夜
分は、展覧会の会場だけは、最初
から閉鎖させてゐました。門番のもの
が延期のことをしらないで、申上げたの
でせう。何卒私に免じお許しを
願ひます。中の飾りつけはひどく
気持よく出来たつもりでをりました。
なほ拝眉の上、いろ〳〵おわびをいたし
ます。失礼、拝具。

封筒表の宛先は「市外　板橋町中丸　二六六／石井鶴三様」、切手は破損しており消印等は欠けている。封筒裏は、右上に「五月十五日」の日付があり、左下に「東京市外、長崎村荒井一八八七／鈴木三重吉／電話小石川二七八七」と印刷され、番地「一八八七」の「七」がペンで「〇」に正されている。

本文に「新宿園」で「展覧会」とあることから、この書簡がしたためられたのは、大正十四年と考えられる。「自由画大展覧会」という名前の展覧会が、赤い鳥社主催で大正十四年四月五日から四月三十日まで、四谷区番衆町（現新宿区）の新宿園にて開催されていたのである。

三重吉は、友人である加計正文に「社では、三月二十五日から四月の二十五日まで函根土地会社の後援で大々的な自由画の展覧会をやるので奔走してゐます。」（大正十四年二月二日付、『鈴木三重吉全集』第六巻、岩波書店、昭57・6。以下の三重吉書簡は注記がない限り、全て同書に拠る）と書き送っており、この展覧会に力を注いでいたことがわかる。

加計正文宛書簡では三月二十五日とあるが、実際の開催日は予定よりも遅れていた。「報知新聞」（大14・4・13）では、「応募者予想以上に多数でありまして、整理に種々手数を要しますため三月二十五日から新宿園で発表展覧会を催す予定を不止得変更して／来る四月五日から開催することに致しました」との「謹告」をしている。また、新聞広告では開催期間が四月二十五日までとなっていたが、この鶴三宛書簡で、実際は招待券と新宿園の要請により、三十日まで会期を延長したことが明らかになった。

展覧会の概要を説明する前に、ここで「赤い鳥」と自由画の関係について触れておく。

大正七年十二月に長野県神川小学校で「児童自由画の奨励」と題する講演を行い、同八年七月に日本児童自由画協会を設立して、講演と展覧会を通じて自由画教育運動に打ち込んでいた山本鼎は、「中央公論」（大9・7・15）で、「模写を成績とする画」すなわち「不自由画」に対して、子供の「チヤーミングな自然観」と「自由活達な表現力」の「生長」を促すものとしての「自由画」を対置し、「創造を成績とする」（「自由画教育の要点」）自由画の普及と臨本の廃止を主張した。同十二年七月には藤五代策との共著で『玩具手工と図面』（児童保護研究会）を出版、「児童と図画」で自由画教育指導法と、審美的観念の啓発という自由画の持つ意義を唱えている。

「赤い鳥」は大正九年一月に「子供の自由画は、多くの場合に於て、殆独創と驚異そのものとの表出ともいふべき、一箇の独立した純芸術品」（鈴木三重吉「自由画の募集について」）であると述べて、初めて自由画を掲載し、以降も毎号、鼎の選評で自由画を募

集し続けた。鼎は誌上で選評とともに、父兄に宛てて自由画教育論を展開した。

つまり、新宿園における展覧会は、自由画の普及を望む鼎と、「純芸術品」を提供したい三重吉の思惑が合致した催しであった。

次に、この展覧会の概要を説明すると、展覧会の作品は、「赤い鳥」誌上で「自由画大展覧会作品募集」と題して募集が掛けられた（大14・3～4）。「自由画大展覧会作品募集」によると、「赤い鳥が率先的に奨励し開発して来た、重大な新文化運動の一つ」である自由画の「芸術的歓喜と、教育上の効果」が認められてきたことを受け、「日本の全領土の小学校生徒」「海外に育ちつゝある、日本の児童」「そのほかすべての方面の少年少女」から作品を募集し、「五大名家の審査の下に、数千百の優秀作を、一場に陳列」する形式を取っていた。「陳列の方式は、この運動の第一人者的権威たる山本鼎先生に直接指令を乞」い「自由画展覧会なるものゝの模範」が目指された。賞品は「赤い鳥社の係る限り、すべての下俗を拒けて、単に審査員諸氏の記名ある賞状にそへて、赤い鳥が特製する記念賞牌だけを贈呈」した。賞牌は一等（一名）が金製、二等（二名）が銀製、三等（三名）が赤銅製、四等（五名）が白銅製、五等（十名）が銅製と、細かく序列化されている。

「出品画」は「水彩画、クレイヨン画、鉛筆画」のみで、審査員は三月号では石井鶴三、長原孝太郎、山本鼎、木村荘八、清水良雄の五名であったのが、四月号では平福百穂が加わって、六名になった。[1]

「赤い鳥」六月号によれば、展覧会への応募作品は「日本全領土及び海外各地」から約二万点に上った（「自由画大展覧会入選表」大14・6）。[2] うち優秀作は三百七十八点で、これらが新宿園の演芸場（広告「桜咲く新宿園の黄金時代」「報知新聞」大14・4・19夕）で展示された。賞牌賞状は六月号発行時で未だ「調整中」であったが、賞牌については図案が清水良雄、製型が朝倉文夫門下の片岡角太郎による「直径二寸の置飾り」（「自由画大展覧会入選表」）であることが知らされ、七月号では入賞作の一部の紹介と共に、原寸大で賞牌の写真が掲載された。それが、後に鶴三が三重吉からお詫びかたがた受け取ったであろう「メダル」である。（【図1】）

鶴三は大正九年四月に開催された日本児童自由画展覧会（東京日々新聞社主催）で審査員を務めたことを契機に日本児童自由画協会の会員になり（山本鼎「日本に於ける自由画教育運動」『自由画教育』黎明書房復刻版、昭57・4）、同展覧会で陳列された絵の「どれも皆私の心をひきつける」（「児童自由画展覧会所感」「中央美術」大9・4、『石井鶴三全集』第一巻、形象社、昭63・12所収）と絶賛していた。赤い鳥社の展覧会も期待していただろうと思われる。

また三重吉も、四月二十七日付小宮豊隆・恒子宛書簡で、「新宿園で開催してゐる赤い鳥社の自由画展覧会は、前例のないほどいゝ絵が沢山集り、陳列も気持よくやり大成功だが、金を出して這入る園内での展覧会だし、足場もわるいので見物人が少い。勿体ない次第なり。」と惜しんでおり、鶴三に披露したかったことだろう。だが、書簡を読む限り、鶴三は、会期が延長された二十五日から三十日の間に新宿園に来園したため、展覧会の絵を見ることができずに帰宅していた。

鶴三が二十五日までに来園できなかった理由のひとつは、春陽会に起きた大事件にあったと考えられる。

【図１】誌上では原寸大で掲載

十二日に岸田劉生が、十六日には梅原龍三郎が相次いで春陽会を脱退した。鶴三は、梅原の退会にあたり、木村荘八・中川一政・小杉放庵とともに彼の引き留めを図っており、自由画鑑賞どころではなかったであろう。結局、その努力は報われなかったが、代わりにその三名と鶴三の仲は深まった。赤い鳥社の展覧会は、鶴三の交友関係が大きく変化した時期と重なっていたのである。

2　展覧会の後援者―箱根土地株式会社

さて、この展覧会が開かれた新宿園は、当時三重吉と縁のある場所であった。

新宿園は「新宿将軍」と呼ばれた投機家浜野茂の邸宅を「函根土地会社」、すなわち箱根土地株式会社（後のコクド、現プリンスホテル、西武グループ）（以下箱根土地）が購入、開発したもので、大正十三年九月に開園された。「自由画大展覧会出品募集」で「清寂な林泉等を楽しむ児童の遊園地で、自由観覧の児童向活動館、歌劇場、童話劇場も開演してゐます。」と紹介されているとおり、人造湖や遊具施設、孔雀館（映画館）、白鳥座（劇場）、鷗座（演舞場）、演芸場などがあり、入園料五十銭（大正十四年四月当時）で園内の娯楽施設を楽しむことができた。開園時間は午前七時から午後九時で、園内では様々なイベントが開催されており、例えば展覧会会期中は、小笠原プロダクションという映画制作会社の「観桜園遊会」が四月十九日に催され、所属俳優が来園している（広告「桜咲く新宿園の黄金時代」前掲）。

箱根土地は大正九年に設立され、軽井沢や箱根の観光別荘地の開発や、東京近郊における学園都市の建設事業、分譲地の開発を行っていた。大正十三年には大泉学園都市および渋谷百軒店の開発、同十四年は小平学園都市の分譲、国立学園都市の開発に着手するなど、活発な経営を行っていたが、一方で土地取得のための借入金が経営を圧迫しており、昭和元年三月には一度、事実上倒産している。新宿園も国立学園都市建設のため、同年一月には分譲地として売却されている。[3]

ところで、大正十四年五月三十日付小池忝宛書簡によると、「建物その他の設備の費用は新宿園といふ子供の遊園が持つてくれ同園内で開催、広告費の三千円を「女性」のロハ顧問のお礼の意味か、中

山太陽堂が持つてくれました、私方は三四百円使つたのみです」とあり、この展覧会の費用のほとんどを新宿園、つまり箱根土地で抱えてもらったらしい。

展覧会が箱根土地の後援なくしてはできなかったであろうことは、「自由画大展覧会作品募集」を一読すれば明らかである。後援は「プラトン文具発売元、中山太陽堂」となっており、箱根土地の名前は出ていない。また、前述のとおり、作品募集の説明文には、賞品は「赤い鳥社の係る限り、すべての下俗を拒けて」賞状・賞牌のみと書かれている。「下俗」とは入選に伴う副賞、つまり物質的な利益を指すと考えられる。

しかし実際は、「新宿園から」多数の賞品が出されていた。新宿園来園者による「自由投票」で一等から三等まで選出者された者にはプラトンシャープ各一本のほか、一等には「赤い鳥」二年分、二等には「赤い鳥」一年半分、三等には「赤い鳥」一年分を、また審査員による一等入賞者と自由投票の一等当選者が在学する学校へは、やはり「新宿園から」図書券五十円が贈られていた。自由画の出品者には新宿園の無料入園券が配られ、展覧会の会期中の四月十日～二十日までを新宿園の「赤い鳥デイ」とし、期間中の入場者先着一千名に「赤い鳥」を一冊贈呈している。該当号（大14・5）の表紙には、「新宿園みやげ」と書かれていた。（【図2】）応募者も来園者も、赤い鳥社が出した賞状・賞牌よりも、新宿園提供の賞品に注目しただろうことは想像に難くない。

箱根土地が後援をした理由は、三重吉の長年の夢であった児童劇学校設立の話が関係していると考えられる。箱根土地は、三重吉に「大阪の宝塚式」の「高尚な歌劇と児童劇団を作るため」の「附属の学校」及び「三千人以上を入れる、東京第一の劇場」建設の計画と、「その生徒養成と、オーケストラ養成と、爾後公演の一さい」の「指揮」（大正十四年一月二十三日付加計正文宛書簡）を依頼していた。

【図2】

読売紙上によれば、それは「少女を中心の演劇研究所」であり、講師陣は、水谷竹紫、小寺融吉、谷山善平、藤間静枝に加え、水谷八重子も名を連ねていた。内容は「小学校卒業以上二十歳以下の女子で予科半ヶ年本科一ヶ年で課目は演劇映画に関する一切の理論及実演と普通学、家政学等も含み立派な演技者であると同時に家庭の良婦となるに足る所謂実科女学校程度のもの」が予定されており、寄宿舎も建築中であった。（「少女を中心の演劇研究所を新宿園の中に」「読売新聞」大13・12・26）

周東美材「童心の〈ユートピア〉―鈴木三重吉の児童歌劇学校構想―」（東京音楽大学研究紀要、平24・12）によれば、この児童劇学校の構想は、同時期に鶴見の花月園からも依頼が来たこと、新宿園

が経営難に陥っていたことから頓挫する。[4] つまり、展覧会は、箱根土地と三重吉との関係で実現した、唯一の大がかりなイベントであった。

従来の研究や批評のなかで、『赤い鳥』はしばしば「高踏的」「芸術至上主義的」との評価が与えられてきた。しかし、『赤い鳥』の芸術なるものは、開発資本と露骨な結びつきを示しており、その意味でけっして高踏的でも非世俗的でもない。むしろ、『赤い鳥』と開発資本は積極的に共犯し、郊外の消費生活者たちの遊びの空間を造成し、近代的な都市空間の再編が向かうべき文化的な夢のありようを提示していた。遊興の都市空間の再編成を導いたのは、子どもの身体であり、学校というメタファーだった。鈴木は、子どもや学校という媒介が物質的基盤をもつものであり透明なものではないことを、誰よりも自覚していた。

周東が右で指摘するように、三重吉は積極的に〈世俗〉と結びつき、資本を得ることで彼の〈芸術〉活動を継続・発展させようとしていた。付け加えるならば、展覧会の賞品に関する扱いでわかるとおり、三重吉は「子どもや学校という媒介が物質的基盤をもつものであり透明なものではないことを」自覚していたからこそ、〈芸術〉と〈世俗〉を線引きし、両者が接続しないもののように扱うことにも意識的であった。三重吉は、発行部数の伸び悩みを承知しつつ、「赤い鳥」を「真実なる純芸術を寄与」（「「赤い鳥」の標語」「赤い鳥」大9・1）する雑誌として、「下俗を拒け」ようと奮闘していたのだ。

3　展覧会の後援者―中山太陽堂

最後に、広告費を「「女性」のロハ顧問のお礼」として引き受け、展覧会の募集要項に後援として名を連ねた中山太陽堂と三重吉の関わりに触れて、論を閉じたい。

中山太陽堂は大阪に本社を持つ、クラブ洗粉やクラブ歯磨で知られる化粧品会社である。同社は大正八年に「プラトン」ブランドで知られる日本文具製造株式会社を、大正十一年に出版社のプラトン社を設立し、大正十一年五月から「女性」を、大正十二年十二月から「苦楽」を発行した。

中山太陽堂と三重吉の関係が始まった時期は不明だが、中山太陽堂は「赤い鳥」に大正八年一月（二巻二号）から広告を載せている。また、小野高裕が指摘するように、大正十年九月に「赤い鳥」誌上で中山太陽堂主催の童話劇脚本懸賞を行っていた（「プラトン社の軌跡」『モダニズム出版社の光芒　プラトン社の一九二〇年代』淡交社、平12・6）。[5]

ここで特筆すべきは、三重吉が「女性」の顧問を務めていたことであろう。最初は「ノミナル（名ばかり―筆者）な顧問」で「主として小山内君が指揮をして」（大正十一年六月八日付小宮豊隆宛、『鈴木三重吉全集』別巻、岩波書店、昭57・7）いたようだが、「「女性」一月号の創作の編輯を、例により小山内が引受けてゐるのに、一寸も纏まらない」（大正十一年九月二十一日付小宮豊隆宛）際に三重吉の案を採用して切り抜けようとしたこともあり、[6] その後いきさつは不明ながら、大正十三年二月の時点で「毎号の計画は私が指図して、きめる」（大正十三年二月一日付中所健二郎宛）ようになったようだ。

ただし三重吉単独で任に当たっていたのではなく、大正十四年五月三十日付小池忝宛書簡では、三重吉一人ではなく、「ヨミウリの社

会部長」と「「読売」の文芸記者」に「黒幕の中で働いてもらつて」いた。森田草平「輪廻　擱筆の辞」（「女性」大14・12）では「中山社主、並びに顧問鈴木三重吉氏に対して、衷心から感謝の意」が表されており、執筆者側からも顧問として認識されていたことがわかる。

なお、永井荷風の昭和三年七月六日付日記によると、小山内薫は社から「毎月千円内外」（「断腸亭日記」巻十二下、『荷風全集』岩波書店、平23・1（二刷））という法外な顧問料を社から受け取っていた。三重吉は前述のとおり「中山にアゴで使はれることになるので、一さいお礼を取らないで」（大正十三年六月四日付石井いく子宛）いたが、その代わりに、「「女性」が十二万も売り出した」ときには「顧問の礼として馬を買つて」（大正十三年六月十三日付小宮豊隆宛）もらってもいたらしい。新宿園の展覧会の広告費も、この延長であった。

また、中山太陽堂は大正十二年に、社会の「真の精神生活と合理的な物質生活との融合によって理想に近い優良な生活を実現したいといふ根強い熱烈な要求」（「創立趣意」「読売新聞」大12・7・14）に基づき、創業二十周年記念事業として中山文化研究所を設立しており、事業内容のひとつに「児童教養研究所」を挙げていた。大正十四年五月三十日付小池忝宛書簡には、「この展覧会は太陽堂の児童文化（ママ）研究所へ貸与し、秋には大阪で開催します」[7]とあり、ここからも三重吉と中山太陽堂が密接な関係にあったことをうかがわせる。

昭和三年にプラトン社が巨額の損失を出して「苦楽」「女性」の両雑誌を廃刊した際も、三重吉は「せめて女性だけは別人の名義で続刊させたい」と「尽力」（昭和三年五月一日付小宮豊隆宛）する。自身の「赤い鳥」も、円本の印税で借金は返済できたものの、昭和三年三月の時点で二万円近い欠損を出し（昭和三年三月十二日付福富高市宛）、翌四年三月での休刊を余儀なくされている。この時期の三重吉は、三年春の日本騎道少年団の設立で心躍らせる一方で、雑誌の相次ぐ廃刊・休刊の後始末に追われた。

4　終わりに

三重吉の鶴三宛書簡に書かれた「展覧会」、すなわち赤い鳥社主催の自由画大展覧会は、山本鼎という自由画教育運動の中心人物の全面的な協力と、当時三重吉が結びつきを強くしていた箱根土地および中山太陽堂の経済面での後援により実現した。箱根土地とは劇学校建設計画の、中山太陽堂とは「赤い鳥」「女性」両誌を通じての関係であり、三重吉は彼らから支援を引き出しつつ、「赤い鳥」誌上では「下俗」、すなわち賞品という物質的な利益を「新宿園から」と明記し、赤い鳥社と分離させるように配置することで、本誌の「純芸術」性を担保しようとした。

もっとも劇学校建設計画も「赤い鳥」も（そして「女性」も）経済問題で行き詰まったのは皮肉な結末と言える。「純芸術」の結実が経済によってこそ支えられるということを、三重吉は知っていながら、結局経済を活用することができなかった。

新宿園の展覧会は、三重吉の志向する「純芸術」と経済の関係と、その行く末を示すものであった。

注

(1) 「赤い鳥」の看板挿絵画家である清水を除けば、いずれも山本鼎と深い関係のある人選であった。鶴三、長原、百穂は、鼎の提唱で大正八年七月に設立された日本児童自由画協会（同九年十二月に日本自由教育協会）の会員、荘八は春陽会の会員である。「四ツの手紙」（山本鼎『自由画教育』前掲）で、自由画にも「律を定めたい」と自由画を批判した荘八が審査に参加しているのは興味深い。

(2) 佳作に広東省広州市沙面の小学生の応募作が入っている。

(3) なお、箱根土地の事情に関しては、西藤二郎「環境変化を活用する経営者—堤康次郎における創生期の箱根土地を中心として—」（「京都学園大学経済学部論集」、平19・3）および、大西健夫・齋藤憲・川口浩編『堤康次郎と西武グループの形成』（知泉書館、平18・3）に詳しい。

(4) 箱根土地の営業部長の談話では、国立学園都市の開発費を確保するため、やむを得ず売却を決定したと話している。なるべく分譲を避け児童遊園地として公開するような売却先を模索していたが、（「持ち堪えられず売りに出た新宿園／児童の遊園地に買はせたい／分譲せずに二百万円」「読売新聞」大15・1・8）不調に終わった。また、鶴三宛書簡にある「劇学校」は、新宿園のものではなく、花月園の学校と思われる。大正十四年四月十三日付加計正文宛書簡で花月園から持ちかけられた劇学校の計画を引き受けたと報告し、同年五月三十日付小池忝宛書簡に、「私は三月から児童劇歌劇学校といふものを作るつもりで二ヶ月間昼夜奔走し、五月一日から少数の生徒を集めて授業にかゝりましたが、金を出す男が急にヘコタレたらしく、前途が危いので、五月七日にキレイサッパリと解散してしまひました」と書き送っている。

(5) ただし、日本近代文学館の復刻版では、結果発表された八巻一号（大11・1）から九巻一号（大11・7）までの広告が、小野が述べるように「表紙裏面、中付け、裏表紙にわたって、すべての広告が中山太陽堂の化粧品と文具品で占められ」たことはなく、また三重吉の書簡を見る限り、「赤い鳥」の買収を中山太陽堂が持ちかけた可能性は確認できない。

(6) 大正十一年十月二十一日付小宮豊隆宛書簡によると、実際は創作欄の原稿が集まり、「童話劇」号にしようとした三重吉の案は実行されなかった。ただ、翌十二年新年号には坪内逍遙「児童用神話劇　因幡うさぎ」が掲載されており、書簡との整合性はついている。

(7) 実際開催されたかは、確認することができなかった。